

ひとみにとどめて

※体験版※



※ 18歳未満閲覧禁止

「義勇さん！待ってください！その鬼は、斬ると血気術が発動します！だめです！」

しかし義勇は炭治郎の言葉を無視し、目の前の緑の肌をした人型鬼の頸を斬った。

そしてその直後、炭治郎と義勇を囲んで足元に四角の光線が現れ、次の瞬間には、木目張りの巨大な建物に閉じ込められていた。いや、出現した。

四隅の形状からして、どうやら箱型らしいことがわかる。

それにしても鬼の頸を斬ったというのに、斬った後血気術が発動するなど聞いたことが無い。今更ながら炭治郎の忠告を聞かず、頸を斬ればすべて済む、と高を括ってしまった自分の傲岸さに、義勇は深く自責した。

「炭治郎、何故この鬼は斬ると血気術が発動すると知っていたんだ」

自分に対する不甲斐ない怒りが、炭治郎にも伝播しているらしく、尋ねられた炭治郎は怖気を感じながらも進言した。

「こ、この鬼の兄弟らしい鬼が討伐されたとき、言い残していたそうです・・・兄を斬ると、屈辱的な血気術が発動する、と・・・」

鬼と交戦している炭治郎と出会ったのはつい先ほどだ。夜の闇に刀が弾かれる切ない音が響き、炭治郎が危機に陥っているのを目撃して、義勇の身体は勝手に動いた。

自分の感情で動いてしまい、鬼の血気術にかかるとは不甲斐なさすぎる。

義勇は素早く刀を閃かせ、周囲の木壁を斬り裂いた。しかし、全くの無傷である。

鉄をも斬る義勇の斬撃が通用しないとは、なんとという硬さだろうか。改めて、義勇は己と炭治郎の置かれた状況に焦りを感じ始めていた。

「義勇さん・・・あれ・・・」

炭治郎に指を差されてその先を見ると、壁にはこう書かれている。

『一方が何をされても、必ず見続けて、終わるまで我慢しないと出られない部屋』

「なんででしょう？意味がわからない・・・」

戸惑う炭治郎だったが、義勇は不確かながら判断した。

これはおおよそ、自分か炭治郎の拷問風景を見せられながら、残された相手は黙ってそれを見続け、抵抗も救い出すこともさせず、ただ見せつけるという意味だろう。

(悪趣味な)

それならば、当然失策を犯した自分が拷問される側にならなければならない。

そう肚を決め、義勇は刀を納刀しながら炭治郎に言った。

「これは一人が拷問されないと出られない部屋らしい。当然拷問は俺が受ける。炭治郎、お前はただ、黙って見ているだけで、この部屋から解放される」

「そ、そんな！」

驚愕した炭治郎が義勇に抱き着き、羽織を引っ張って大きな赫い目を見開いて義勇を見上げてきた。

「義勇さんが拷問を受けるなんて俺は嫌です！俺が請け負った任務なんですから、俺が拷問を受けます！」

「お前の忠告を聞かず頸を斬ったのは俺だ。失態は俺にある」

しかし、どういう拷問がこれから行われるのか、それが判然としない部分が義勇の心を波立たせる。

炭治郎が義勇の羽織を離し、一歩下がったところでキン、と高音が響いたと思うと、自分と炭治郎の間に透明の硝子のような壁が生じていた。

「ぎ、義勇さん！」

「炭治郎！」

互いに壁に両手を付けて手を握ろうとするが、透明の壁に阻まれて、掌に体温すら伝わってこない。

義勇が感情をぶつけるように拳で壁を強かに打つが、割れるどころか振動もしない。伝わってくるのは鉄のような重厚さだけだった。

「炭治郎、離れている！」

義勇は刀を取り出し、切っ先を壁に向けて突きの連打を繰り返した。

水の呼吸、雫波紋突きだ。それでも壁はやはりびくともせず、技の反動がビリビリと義勇の腕に返ってくるだけだった。

「義勇さん！お、俺も・・・！」

炭治郎が刀を青眼に構えると、突然天井から赤い縄が降りてきて、刀を握った両手ごと縛り上げてしまう。その腕を上方に引き上げられ、炭治郎は人の形で拘束されてしまった。

「うわっ！なんだこれ！」

「炭治郎！炭治郎！」

（まずい、これでは炭治郎が拷問される側になってしまう！）

焦った義勇は渾身の力で次々と技を繰り出すが、透明の壁はおぞましいほどに頑として二人の間を阻んでいる。むしろ、壁が硬すぎて義勇の両腕に反動が返り、腕を痛めそうなほどだった。

「ぎ、義勇さん！もう無理はしないでください！お、俺が拷問を受ければ、出られるんですから・・・！」

炭治郎は片目を強く閉じて苦しそうに言い放つ。赤い縄に縛り上げられた腕が痛むのか、刀を握る両手に縄が食い込み、手が赤くうっ血している。

刀だけは離さない覚悟だったが、縛り上げられる痛みにも手の感覚がなくなり、ふ、と力を抜いた瞬間、新たな縄が現れて刀を横殴りに弾き飛ばした。

「あつ！しまつ・・・！」

すると炭治郎の両足にも赤い縄が螺旋状に絡みつき、抵抗できないほどの強い力で引つ張られて膝をつかされてしまう。

「くっ、ううっ・・・！」

「炭治郎！待ってろ、すぐ助ける！」

義勇は再び刀を構えるが、その両腕はすでに技の反動を受けて力も半減してしまっている。

「だ、大丈夫です、義勇さん！こんな・・・うぐっ・・・！」

会話していた炭治郎の口の中に、赤色をした内臓のような縄が入り込んで言葉を切らせた。

「んぐっ、んぐぐっ・・・！」

鼻で必死に息をしないと息がつかまってしまうほどの大口を開けられ、さらに口の中に甘い液体が流されてくる。

（な、なんだ？得体が知れない、絶対に飲んだら駄目だ！）

危険だと判断した炭治郎だったが、鼻呼吸だけの限界を迎え、生唾を飲み込んでしまった瞬間、甘い液体をついゴクリと飲み込んでしまった。

（あっ・・・！）

しまった、と思ったがその時点でもう遅く、炭治郎の喉は流される甘い液体をゴクゴクと飲み続けてしま

(身体の中から溶かされてしまうのか？い、嫌だ……！ 糲豆子……！)

自分の失態を悔やむが、幸い箱に入った糲豆子は鬼との交戦中に地面に降ろし、この箱世界の中にはいない。しかし、炭治郎が危機に陥っているのには変わりなく、喉が灼け付くほど甘い液体をふんだんに飲み込まれ、ようやく口から縄が去ると、炭治郎は解放された口で必死に呼吸し、これまでの息苦しさを取り戻そうと肩で息をし、飲み込んだ液体を吐き出そうと舌を突き出して呻く。

「ううっ……ぐっ……かはっ……」

胎内に取り込んだ溶液は一滴も吐き出されることなく、飲み損ねた口元に残された液体だけが炭治郎の唇から顎を伝って落ちる。

炭治郎のその様を見て、義勇は一瞬息を呑んだ。

息苦しさに上気した顔に、涙で潤んだ大きな赫い瞳、口から零れる白い溶液の垂れる様が実に淫靡で、普段の快活な炭治郎とは違った様子に、義勇は戸惑った。

義勇と炭治郎はいわゆるやんごとなき関係だった。

どちらから恋情を告白するでもなく、接吻を交わし、いつの間にか闇で炭治郎を組み敷いていたが、炭治郎は抵抗せず、嬉しいと涙を流していた。

身体に負担がかかるので三度しか身体を交わしたことはないが、明るい下で見る炭治郎の平素とは違う表情に、胸が一瞬高鳴ってしまう。

(何を邪念を！)

義勇は自分の情欲に怒りが湧き上がり、それを払拭するかのように透明な壁に向かって刀を振り下ろす。しかしやはり、恐ろしく頑丈だ。振り下ろした刀は倍の強さで跳ね返ってくるほどだ。

炭治郎は膝立ちの体勢にされ、こちらに向かって人の字に拘束されている。天井から、地面から赤い縄……生き物のように動くので触手と言いついてよい赤い物体が、炭治郎の身体を取り囲み始める。そのくねる身体を炭治郎に巻き付け、怪しげな粘液を分泌し続けている。

「はあ、はあ、はあ……」

恐怖からか、炭治郎は荒い息で身体を震わせて黙ってされるがままになっている。しかしその表情は、怯えていると言には的外れ、発情し始めている、と言いついて差し支えない彩なる顔だった。

(なんだこれ……身体が……熱く……んっ、ぞくぞく……するっ……！)

炭治郎と閨を共にした義勇にはわかるが、あれは炭治郎が快楽を感じている時の顔だ。薄暗い褥でははっきり見ることはできなかったが、それすら義勇を興奮させる焚火だった。

いま、初めて見る明るい下での炭治郎の妖艶な表情に、義勇は思わず生唾を飲みそうになった。

先ほど飲み込ませた粘液に、炭治郎の性感神経を欲情させる成分でも入っていたのだろう。赤い触手は炭治郎の顎を上げさせ、何度も口に溢れるほど注ぎ続けている。その度に、炭治郎の表情が淫に蕩け、赫い瞳が妖しく潤み、これまで義勇にしか見せていなかった表情を露にしてゆく。

「炭治郎！すっかり気を持って！」

「は、はい、義勇さん……」

壁は分厚いが、互いに会話はできる。考えれば考えるほど珍妙な壁だが、義勇はこの壁が今、なによりも憎らしい。

膝立ちで立っている炭治郎の両足の間に大人の腕ほどの赤い触手が滑り込んできた。するとそのまま上方に引っ張り、炭治郎の両足の間に強く食い込ませてきた。

「んんんんっ！」

拘束されている炭治郎の身体が反り返り、顔が朱に染まる。

闘事の時の炭治郎の姿を臉に焼き付けている義勇にはわかる。炭治郎は明らかに官能を感じているようだった。もしや、と嫌な予感がよぎったが、それは射的を射ていた。

実体は、触手に溢れるほど飲まされたのは強烈な催淫薬で、一口飲んだだけで一晚男が欲しくて狂うほど強烈な物を、炭治郎は溺れそうになるほど飲まされたのだ。

身体中のあちこちが熱く、肌が恐ろしく敏感になり、感覚はすべて快楽に変わってしまった。

炭治郎は拘束されていて屈辱なはずなのに、身体に巻き付けてくる触手の締め付けすら快楽に変わってしまった。身体に擦れる隊服すら、身体中の皮膚の性感を震わせる感覚になってしまっている。

そんな状態で、最も性的快楽を感じる両足の間触手を食い込まされて、愉悦を感じないわけがない。触手が食い込んだ瞬間、炭治郎の身体中に淫熱があつという間に広がり、腰が痺れる快感が襲った。

「あつ、ああつ・・・！」

身体中をブルブルと震わせ、想像以上の強烈な快感に炭治郎が喘ぐ。仰け反っていた首を降ろし、前方に視線を戻すと、壁越しに自分の姿を見ている義勇と目があつた。

「ぎ、義勇さん、み、見ないでくださいっ！」

息が止まるほどの羞恥心が膨れ上がり、炭治郎は必死に叫んだ。しかし、触手が「黙れ」と言わんばかりにさらに強く食い込んでくる。

「んんっ！うううっ・・・！」

淫液のせいで触れずともすでに反応していた雛先を隊服越しに刺激され、腰の中心にまで快楽の痺れが甘く響く。両足の力がなくなり、しゃがんでしまいそうになるが、腰を落とせばさらに触手が食い込み、快楽が強くなってしまふ。

こんな無様な姿を義勇に見せたくなどない。炭治郎は身体に巻き付く触手を振り解こうと暴れるが、いたずらに両足の触手が更に食い込むのを助長するだけだった。

（炭治郎っ・・・！）

剣技の全てをもつてしても、壁にはかすり傷一つつかない。義勇の両腕は、刀を握る手も震えるほどに衝撃を受けてしまっている。手が動かなければ、今度は蹴りで壁を破ろうとするが、刀でも果たせなかつた踏破が、足技で成せるはずもなく、やはり壁は沈黙したままだった。何をしても壁を壊せない自分の未熟さに苛立つ。目の前で、炭治郎が妖しげな触手に絡まれて鬨りものにされようとしているというのに、なにもできない。

「義勇さん、見ないでっ!」

炭治郎の声が響き渡り、義勇は反射的に炭治郎の言うがまま、目を閉じた。

「うっ・・・!」

すると、割れんばかりの強烈な頭痛が義勇を襲い、目を開けるとそれは霧散する。しかし、また目を閉じると強烈な頭痛が生じる。

(この箱から出る条件は見続けることっ・・・こ、こんな炭治郎の姿を見続けなければならないのか!)

義勇はこの血鬼術をかけた鬼に心底怒りを覚えた。

目の前で弟子が、愛する者が辱めを受けているというのに、それを最後まで見続けなければならぬとは。

「あつ、あつ、あああつ！」

ずるずると股間の触手が前後に動き、炭治郎に艶めいた声を上げさせる。摩擦される度にぞくぞくと射精。絶頂の快感がせり上がり、炭治郎は我慢の限界まで責め上げられていた。隊服越しに触手が炭治郎の体中を撫で回し、胸部周辺を円を描くように撫で回され、その刺激にも激しい快感が伴ってくる。

「あつ・・・ううっ、はあ、や、やめろ、あつあああつ！」

炭治郎の呼気は熱くなり、息を継ぐのも速くなる。呼吸を操作して必死に快楽を逸らそうとするが、絶頂の快感は容赦なくやってくる。

壁の向こうに目を向けて義勇を見ると、頭を押さえながら、必死で目を瞑っている姿が炭治郎の赫い目に映った。

「義勇さん、どうしたんですか、あつ、ぎ、義勇さんっ・・・！」

艶声になりそうなのを押しとどめて、炭治郎はなんとか、しっかりとした口調で言葉を紡ぐ。

「炭治郎、気にするな！うぐっ・・・！」

我慢強い義勇が呻くほど、身体に何らかの衝撃を感じているらしい。

自分の事ばかり考えていたが、もしや義勇が拷問を受けている方だろうか、と炭治郎は思い至った。しかし、明らかな責めを受けているのは自分だ。よく見ると、義勇は目を開けると少し表情が緩み、目を閉じると苦痛の顔になっている。

この箱に閉じ込められ、解放される条件は、「見続けること」だ。それに思い至った炭治郎は、義勇に向かって声を放った。

「ぎ、義勇さん、み、見てください、そうしないと、ここから、で、られ、ないん、ですからっ・・・！
あぁっ！」

触手全体から怪しげな溶液が零れ出し、炭治郎の隊服に染み込むと、服は水で溶いた紙のように溶けていった。

「うわっ！うわあああっ！」

自分も溶かされる、と炭治郎は一瞬恐怖に包まれたが、下半身の快感と身体中を這い回る触手の動く感覚に意識が愉悅に流れてしまう。

詰襟の隊服部分がほとんど溶かされ、中の白シャツも簡単に溶けていく。現れたのは、ひどく敏感になった傷だらけだが、瑞々しい若さの弾ける健康な肌だった。

その肌の上を、ぬるりとした感触の赤い触手が撫で回しにかかり、炭治郎は一斉に全身で感じる愉悅に悲鳴を上げてしまう。

「ひっ・・・！」

背中のかぼみを上下に撫でられ、両胸を撫で回されて、脇腹を擦られる。耳にも舐めるように触手が絡みつき、そのどこをとっても、声を抑えられないほどの激感を炭治郎は味わわされてしまう。

「うあっ・・・！あっ！ああっ・・・！」

隊服の下半身は未だ溶けておらず、縄の食い込みはどんどん強くなる。すでに痛みに切り替わるほどの強度になっているが、炭治郎の感じる境界を見定めているのか、刺激を快楽として受け取るよう悦楽の内に留めている。

(も、もう駄目だ、精が漏れるっ・・・！)

若い炭治郎の身体は強烈な催淫作用のある溶液と、身体への愛撫で極限に達していた。ひと息吹かれれば射精絶頂を迎えてしまうほどの薄氷の我慢の中、縄が前後に激しく動き出す。

「あああああつ！やめ、やめ、ああつ！ああああつ！」

炭治郎の身体が大きく仰け反り、痙攣したかと思うと、次の瞬間には身体の力が抜け、義勇の目にも達悦したのだと分かった。

しかし、射精絶頂を迎えても縄は動きを止めようとしなない。下半身の隊服にも怪しげな溶液が巻き散らされ、洋袴がどんどん溶けてゆく。

(うう、こんな、やられっぱなしじゃ情けないぞ、なんとか抵抗しないと・・・！)

反抗心を沸き立たせる炭治郎だったが、両胸の桜色の突起を触手の先端に触れられ、上下に素早く擦られた瞬間、身体の性感が爆発した。

「あつ、あつ、あああああつ！」

甲高い甘い声を上げて、炭治郎が赫い瞳から涙を流す。

悔しいが、義勇との闘でもここまで強い快楽を感じたことはない。それを思うと、目の前の義勇に申し訳なくて、激感も伴い、次々と瞳から涙が溢れ出す。

「炭治郎！」

壁の向こうの義勇は、無駄だとわかっているながら壁を乱打し続け、炭治郎を救出しようとしている。これ以上無駄に壁を打ったとて、跳ね返る力で義勇の身体が傷んでしまう。

「んんっ！ぎ、ぎゅ・・・さん、も、やめてください、見ていけば、終わるんですからっ・・・！」

想い人に自分のあられもない痴態を見られ続けるのは羞恥の極致だ。だが、義勇のために炭治郎は耐えなくてはならない。

「うあっ！あっ！あっ！」

自分の放った精液でぬるぬるになった股座を、食い込んだ縄がさらに激しく、小刻みに前後運動し、めちやくちやに扱われる快楽にまた絶頂の昂ぶりがせり上がってくる。

(さ、さつき達したばかりなのに・・・)

炭治郎は知る由もないが、触手の催淫液のせいで炭治郎の身体には精力が注ぎ込まれ、雛先から連続射精ができるようにされてしまっていた。

萎えても性的刺激があるとすぐに発情し、絶頂への快感を敏感に拾ってしまう。

「あ、あ、あああっ・・・！」

衣服を溶かす溶液が下半身へ、前後の摩擦責めにあっている股座にも及び、洋袴が溶け、下帯も露になったが、それもすぐに消失し、炭治郎のむき身の雛先が外界に露出してしまった。

今の炭治郎を覆っているのは、拘束して掲げられている両腕の羽織と隊服の袖と、腰のベルトに、ふくらはぎの脚絆だけだった。

全裸も疊惑的だが、一部の服を残した半裸の姿も煽情的で、義勇はつい欲に駆られて見惚れてしまう。

(い、いかん、こんな誘惑に流されてはいけない！鬼の言いなりになどなるものか！)

義勇は炭治郎にこのような屈辱を味わわせている鬼の所業に怒りを覚え、「最後まで見続ける」という条件に抗って何度も目を閉じた。その度に割れんばかりの激痛が頭に響き、目を開ければ炭治郎の艶姿が焼き付いて、恥ずかしそうな炭治郎の表情を見てまた目を瞑る、という行為を繰り返している。

「うあつ！あつ！あつあああつ！」

激しい食い込みを受けながら下半身を擦り回され、炭治郎はすでに五度目の射精を強要されていた。遮る布が無くなった分、より性感に直接刺激が働きかけ、我慢することもままならない。すると責めていた縄触手がずると擦りながら両足の間から去ってゆく。

(はあ、はあ、よかった、止まった、少し休憩を・・・)

しかし触手は炭治郎を休ませるために引いたのではなかった。

油断して腰を落としていた炭治郎の両足の間に、また触手が渡される。

「あつ・・・！」

またもや両足の間に食い込んだが、その感触は先ほどの縄触手とは比べ物にならないほどの蕩刺激だった。炭治郎を摩擦する触手の内側には、ぬるぬるの粘液を湛えた刷毛状の毛がびっしり生え揃っていて、性感帯のない部分をこれで一瞬擦られただけでもゾクッとするだろう、淫靡な仕様だというのに、それが最も感じる性感帯に余すことなく密着している。

最も責めの的にされている雛先に、その下の種玉、そして会陰に秘孔の入口、全てを一気に責め立てられ、この触手が強く食い込むだけでも絶頂しそうなほど、炭治郎は甘い快楽の痺れを感じさせられた。

（だ、だめだ、こんなもので責められたら、余計に義勇さんの前で恥ずかしい姿を見せてしまう！）

炭治郎の顔が羞恥で朱く染まる。大きな赫い目からは涙が零れそうで、その子供らしさを残した顔立ちと相まって、可憐と言える表情だ。

（で、でも、義勇さんに最後まで見てもらわないと、この箱から出られない・・・恥ずかしいけれどそんなことを言ってる場合じゃない、我慢しないと・・・！）

「ぎ、義勇さん、俺を見てください、お願いします！」

本当は恥ずかしすぎて身体を隠したいほどだというのに、炭治郎は気丈にもそう言い放った。これだけ羞恥と快楽の責めをされて、自分の存在を心に留める炭治郎のいじらしさが、余計に愛しさを助長させる。

義勇はどこまでも鬼に抗い、頭痛など構わず目の開閉を続けていた。

「炭治郎っ……！心配するな、すぐに出す手立てを……！」

先ほどの攻撃で傷一つつかなかった強固な壁への無力感に、思考を奪う頭痛が相まって、義勇は活路を見いだせない。だが、この箱を破壊しなければ炭治郎がますます淫らに仕立てられてしまう。

自分の愛しい者が自分以外の手で乱れる様を見せられて、こんなに怒りが湧くとは自分でも思いもよらなかった。

しかし異形に嬲られる炭治郎を見て、義勇の中の雄の部分がさざ波立たないといえば嘘になる。

気づかないふりをして誤魔化しているが、壁が無ければ、今すぐにでも触手を引き千切って、炭治郎を組み敷いて思う存分抱き潰したい。

異形に絡みつかれて感じる炭治郎が、眩暈がするほど色っぽい。壁は硬いが、炭治郎の肌の上を撫で回している触手が出す粘液の音や、擦れる音、両足の間を責める刺激的な音まで鮮明に聞こえてくる。

※中略※

「あつ・・・！あぁ、はぁああつ・・・！」

ぬるぬるした触手がどんどん股座に食い込み、炭治郎の性感帯を一斉に責めてくる。触手から生えた刷毛がざわざわと蠢き、鋭敏になった雛先や会陰、秘孔をまさぐってさらに責めを追加してくる。

これだけで射精絶頂しそうな快感だったが、炭治郎はなんとか堪える。しかし、身体に纏わりつく触手が、胸の桜色を上下に素早く擦り、人間の舌のような感覚の触手がねつとりと舐め回し、これまで感じたことが無いほど、胸で快楽を拾っている。

戸惑いながらも確実に下半身に影響させ、身体中が触手の愛撫で淫熱に焼かれ、炭治郎はすでに抱かれる身体にされてしまっていた。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・あつ、あつあああつ！」

若い肢体が仰け反り、雛先から白液が吐き出される。触手の催淫液のせいか、普段の射精よりも快感が深く、一度出すだけで気が遠くなるほどの快感を覚えてしまう。

ぐちゅぐちゅと厭らしい音を立てて、容赦なく触手は両足の間食い込み、前後に激しく動いて雛先を的にした責めは続く。

想い人の前で粗相をしてしまった羞恥の激しさに、炭治郎は今すぐこの世から消えてしまいたくなる。

「ぎゅ……さん、すみませ……俺、我慢できなくて……っ！」

しかし、義勇は炭治郎に淫らな姿を見せられて、激しい劣情と怒りを感じていた。胎から溢れるほど怪しげ気な粘液をふんだんに注がれ、それを止められなかった自分が許せない。

義勇は衝動に任せて、渾身を炭治郎の秘孔に突き挿れた。

「あつ……は……あつああああああ……！」

耽溺したような炭治郎の艶声が月夜に響き、風にそよぐ木々に吸い込まれる。

碌に慣らすこともできず衝動のまま一息に突き入ってしまった自分の我慢のなさに、義勇は心中舌打ちした。

触手に散々刺られた洞内は、すでに最後の一撃を待ちわびていたらしく、渾身が挿ると一気に締め上げ、義勇に尋常ではない快楽を伝えてくる。

「ああああつ！義勇さん、義勇さん……！義勇さんだ、嬉しい……！」

涙を拭いながら、炭治郎は想い人と繋がる喜びと快感にむせび泣いていた。

（あつ……もつと強く……酷くしてほしい……）

炭治郎の脳裏にいつもなら決して思い浮かばない被虐の官能が湧き上がり、これまでの闇でみせたことのない腰遣いを無意識にしてしまう。義勇の腰の動きに合わせて腰を引き、突き上げ、自分から快楽を貪りに行く。

挿入するだけで昇天しそうな洞内が、さらに動かされて義勇はすぐに果ててしまわないようになんとか辛抱強く堪える。

あの慎ましい炭治郎がこんな動きをするとは、触手にかけられた溶液はよほど強力な催淫作用があったようだ。

そして、自分の身体もおかしい。炭治郎の耳朶の液体を舐めてから、身体が熱くて腹の底から炭治郎に対して衝動が込み上げてくる。

とうとう義勇は堪えられず、炭治郎の足を抱え直して、自分の思う様動き始めた。

「あああつ！あつ！あつ！あ、あ、あつあつあつあつあつ！」

炭治郎の裏返った甘い声など初めて聞く。これまでの闘いで、彼がいかにも我慢していたのか義勇は痛感するが、その妖艶な声に突き上がる性衝動が止まらない。

「っ……っ！」

もつと炭治郎を好くさせたくて、義勇は渾身をさらに奥へと突き上げた。洞内はますます熱く狭くなり、眩暈がするほどの愉悦が義勇にもたらされたが、それは炭治郎も同じらしかった。いや、それ以上のようだった。

「ああああああっ！」

義勇を跳ね飛ばす勢いで大きく背中を弓なりに反らせて、炭治郎は足先を痙攣させ、その両手は地面に生えた草束を掴み、今にも引き抜きそうなほどに力が込められている。

いつも爽快で快活な日向のような少年が、月光に照らされて、自分の所作で見も世もなく艶やかに身悶えている。

それを思うと、義勇はさらに激しい衝動を内から感じ、何度も炭治郎の奥深くを穿ち、引き抜き、穿った。

対面で座った体勢になったが、互いは繋がったままだ。自分の体重でさらに義勇の渾身が奥に挿ったらしく、炭治郎は首を仰け反らせて激感を訴える。

触手に散々催淫液を塗されて飲まされ、発情の限界まで達していた炭治郎には、どんなに酷くされても義勇からの愛撫は快楽にすり替わる。

これまで侵入してこなかった胎の奥にまで進まれ、通常なら痛みを感じるはずの場所が、この上なく気持ちよい。

炭治郎は義勇の背中に手を回して硬く抱き締め、その美貌に何度も接吻をし続けた。

「はあ、はあ、義勇さん、義勇さん……」

当然義勇も負けず、炭治郎へ激しい口吸いを仕掛け、お互いに相手の唇を食べてしまいそうな勢いだ。義勇にとっては、積極的な炭治郎の所作が嬉しくて堪らない。

自然、渾身の熱も強くなって、大きくなった渾身に炭治郎はまた背中を仰け反らせて大きく喘いだ。

炭治郎を穿つ腰の動きはそのままに、義勇は炭治郎の裸の身体に掌を這わせ、さらに炭治郎の性感を煽ってゆく。

信じたくはないが、あの触手によって胸で果てた様に見受けられた。

自分以外の者が炭治郎の身体を勝手に開発するなど、悔しさの極みだった。もつとも、義勇も男が胸などで果てられるなど知らなかったとはいえ、やはり面白くない。

抱き締める隙間から見える炭治郎の桜色は、今も硬く尖って清廉な色香を醸し出している。義勇は渾身での突き上げを腰の動きに任せ、その桜色を指で触れてみた。

「あっ……」

これまで聞いたことが無い炭治郎の蕩けた声が響き、義勇は戸惑ったが、続けて桜色を上下に弾くと、炭治郎は楽器のように、あ、あ、と可憐に喘いだ。

それが嬉しくて、義勇は何度も爪で桜色を弾く。炭治郎の声をもっと聴きたい義勇とは裏腹に、胎内だけでなく胸にまで快樂の澱を蓄積されて、炭治郎はもうどこが感じているのかわからない。

ただ、義勇にされているという事実と、頭がおかしくなりそうな快樂で、右も左もわからず、何もかも忘れてしまいたいそうだった。

「義勇さん、義勇さんっ……！」

それだけを理性を留める呪文のように唱え、炭治郎は喜びで涙を流しながら義勇にしがみ付いている。顔に口付けをいくつも落とし、胸の桜色を愛撫され、体内には愛しい相手の渾身が挿入されている。

※中略※

「あつ、あつ……」

また炭治郎が艶やかな声を放ち始める。それに呼応するかのように、炭治郎の胎が義勇を抱き締めるように締め付ける。

(炭治郎、俺だけを見ていてくれ)

「……お前が、他の者に触られるのは……見ていて……」

(嫌だ)

義勇は最後の言葉を飲み込んだ。言ってしまったえば、自分を独占欲の強い男だと思われて嫌われてしまうかもしれない。だが、先ほどの愛らしい弟子が目の前で蹴られたのを見させられ、義勇は視界が真っ赤になるほどの怒りを感じた。

自分は炭治郎が好きで堪らない。

炭治郎は好きだと言ってくれるが、こんな自分のどこを好きなのだろうか。

身体を開いてくれるほどには、好まれているのは嬉しい。男子が男に組み敷かれるなど、並大抵ではできないものではない。

炭治郎は優しい。匂いで自分の好意を知って、それも愛ではなく優しさで包み込んでくれているのかもしれない。

しかしそれでも構わない。
今手の中にある温かさは、炭治郎で、変わらないのだ。

(本当に愛おしい)

「あつ、あつ、あ、あああつ、あつ！ぎゅ、さ、ん、あああ！」

(可愛い、好きだ)

「好きです、義勇さん、お、俺、あなたじゃなきや、い、嫌、ですっ……！あんなっ、あんな……！」

そう言うと炭治郎は目を瞑り、義勇の背中に回した手の力を強くして、子供のように泣き始めた。
義勇は一瞬戸惑ったが、すぐに理解する。

一番の被害者は、得体の知れない触手に身体を蹴られた炭治郎だ。義勇は自分の気持ちだけを先走らせて、炭治郎の内面を慮らなかつた自分を悔いた。

炭治郎の涙を舐め、吸い上げながら、頭を何度も撫でて顔中に唇を降らせる。

「よく耐えた。俺も、見ていて辛かつ……」

必要のない自分の気持ちを口走りそうになり、義勇は押し黙った。代わりに、炭治郎の身体を掻き抱いてさらに奥へと渾身を進める。

「あああつああ——！！」

体内の甘い感覚を知る直前、炭治郎は義勇から嫉妬の匂いを嗅ぎ取った。

(義勇さんが、嫉妬してくれてる……！)

それを理解した瞬間、炭治郎の身体はさらに熱を帯び、華が開いたように心が温かくなった。

「義勇さん、あ、あぁっ、好きです……あっ、好き……んっ、ほんとうに、はぁぁっ！好き、です……！」

喘ぎ交じりに好いた相手に好意を叫ばれるのが、これほど獣欲を注がれるものだとは思っていなかった。義勇の身体はますます猛り、炭治郎を欲して自制できないほど暴走してしまう。

「炭治郎、炭治郎……！」

激しく抽挿しながら、愛おしさを込めて名前を呼ぶ。炭治郎は義勇の動きにつられて仰け反ったり、爪を立てて来たり、唇を求めて来たり、自分を誘うかのように愛らしい仕草をどんどん見せてくれる。渾身の快楽は極限まで達し、義勇は息を乱して炭治郎の中を探る。

「あっ、あっ、は、果てる……！も、もう、だめです、あぁぁぁぁっ！あっ！あっ！あっ！あぁっ、あぁぁぁっ！」

洞内が急激に熱くなり、義勇の渾身を柔らかい洞内で強く締め付ける。その直後、炭治郎は頭と背中を仰け反らせて、激しく痙攣した。

※中略※

炭治郎の耳朶を噛むと、予想外に色に濡れた声が零れた。触手に塗された溶液がここまで濡れていて、義勇の舌に触れた瞬間、甘い、と感じた。

炭治郎の体中を撫で回すと、肌の感触に紛れて熱く濡れた溶液も感じられる。義勇はその液に触れながら、掌から腕を伝って、身体も熱くなってゆくのを感じ始めた。

耳を愛撫されただけで、炭治郎の顔は朱に染まり、赫い目は潤んで呼気も熱い。鬼血術が解けたからと言って、身体がすぐに平常に戻るわけではなさそうだ。

試しに下腹に手を滑らせ難先に触れてみると、確かに反応している。触れた瞬間、炭治郎がヒクリと小さく震えたところを見ると、先ほどの責めの余韻がまだ残っているようだった。

炭治郎を夜露の散りばめられた少し冷たい草の褥に押し倒し、義勇は炭治郎の両足を掴んで秘孔を露にする。その瞬間、炭治郎が焦った声で制止した。

「ぎ、義勇さん、待って！今、今は……！足降ろしてください！だめ、だめだめ！見ないで！」

炭治郎が顔を朱に染めて苦痛のように目を瞑ると、秘孔から散々流されたらしい粘液がとろとろと零れ出した。

想い人の前で粗相をしてしまった羞恥の激しさに、炭治郎は今すぐこの世から消えてしまいたくなる。

「ぎゅ……さん、すみませ……俺、我慢できなくて……っ！」

しかし、義勇は炭治郎に淫らな姿を見せられて、激しい劣情と怒りを感じていた。胎から溢れるほど怪しげ気な粘液をふんだんに注がれ、それを止められなかった自分が許せない。

義勇は衝動に任せて、渾身を炭治郎の秘孔に突き挿れた。

「あつ……は……あつああああああ……！」

耽溺したような炭治郎の艶声が月夜に響き、風にそよぐ木々に吸い込まれる。

碌に慣らすこともできず衝動のまま一息に突き入れてしまった自分の我慢のなさに、義勇は心中舌打ちした。

触手に散々舐られた洞内は、すでに最後の一撃を待ちわびていたらしく、渾身が挿ると一気に締め上げ、義勇に尋常ではない快樂を伝えてくる。

「ああああつ！義勇さん、義勇さん……！義勇さんだ、嬉しい……！」

涙を拭いながら、炭治郎は想い人と繋がる喜びと快感にむせび泣いていた。

(あっ・・・もつと強く・・・酷くしてほしい・・・)

炭治郎の脳裏にいつもなら決して思い浮かばない被虐の官能が湧き上がり、これまでの閨でみせたことのない腰遣いを無意識にしてしまう。義勇の腰の動きに合わせて腰を引き、突き上げ、自分から快楽を貪りに行く。

挿入するだけで昇天しそうな洞内が、さらに動かされて義勇はすぐに果ててしまわないようになんとか辛抱強く堪える。

あの慎ましい炭治郎がこんな動きをするとは、触手にかけられた溶液はよほど強力な催淫作用があったようだ。

そして、自分の身体もおかしい。炭治郎の耳朶の液体を舐めてから、身体が熱くて腹の底から炭治郎に対して衝動が込み上げてくる。

とうとう義勇は堪えられず、炭治郎の足を抱え直して、自分の思う様動き始めた。

「ああっ！あっ！あっ！あ、あ、あっあっあっあっあっ！」

炭治郎の裏返った甘い声など初めて聞く。これまでの闇で、彼がいかにか我慢していたのか義勇は痛感するが、その妖艶な声に突き上がる性衝動が止まらない。

「っ……っ！」

もっと炭治郎を好くさせたくて、義勇は渾身をさらに奥へと突き上げた。洞内はますます熱く狭くなり、眩暈がするほどの愉悅が義勇にもたらされたが、それは炭治郎も同じらしかった。いや、それ以上のようだった。

「ああああああっ！」

義勇を跳ね飛ばす勢いで大きく背中を弓なりに反らせて、炭治郎は足先を痙攣させ、その両手は地面に生えた草束を掴み、今にも引き抜きそうなほどに力が込められている。

いつも爽快で快活な日向のような少年が、月光に照らされて、自分の所作で見も世もなく艶やかに身悶えている。

それを思うと、義勇はさらに激しい衝動を内から感じ、何度も炭治郎の奥深くを穿ち、引き抜き、穿った。

「あっ！あっ、あっ、あっ、あっ、ああっ！ああああっ！だ、め、おか……しくっ……」

対面で座った体勢になったが、互いは繋がったままだ。自分の体重でさらに義勇の渾身が奥に挿ったらしく、炭治郎は首を仰け反らせて快感を訴える。

触手に散々催淫液を塗されて飲まされ、発情の限界まで達していた炭治郎には、どんなに酷くされても義勇からの愛撫は快楽にすり替わる。

これまで侵入してこなかった胎の奥にまで進まれ、通常なら痛みを感じるはずの場所が、この上なく気持ちよい。

炭治郎は義勇の背中に手を回して硬く抱き締め、その美貌に何度も接吻を続けた。

「はあ、はあ、義勇さん、義勇さん……」

当然義勇も負けず、炭治郎へ激しい口吸いを仕掛け、お互いに相手の唇を食べてしまいそうな勢いだ。義勇にとっては、積極的な炭治郎の所作が嬉しくて堪らない。

自然、渾身の熱も強くなって、大きくなった渾身に炭治郎はまた背中を仰け反らせて大きく喘いだ。

炭治郎を穿つ腰の動きはそのままに、義勇は炭治郎の裸の身体に掌を這わせ、さらに炭治郎の性感を煽ってゆく。

信じたくはないが、あの触手によって胸で果てた様に見受けられた。

自分以外の者が炭治郎の身体を勝手に開発するなど、悔しさの極みだった。もともと、義勇も男が胸などで果てられるなど知らなかったとはいえ、やはり面白くない。

抱き締める隙間から見える炭治郎の桜色は、今も硬く尖って清廉な色香を醸し出している。義勇は渾身での突き上げを腰の動きに任せ、その桜色を指で触れてみた。

「あつ・・・」

これまで聞いたことが無い炭治郎の蕩けた声が響き、義勇は戸惑ったが、続けて桜色を上下に弾くと、炭治郎は楽器のように、あ、あ、と可憐に喘いだ。

それが嬉しくて、義勇は何度も爪で桜色を弾く。炭治郎の声をもっと聴きたい義勇とは裏腹に、胎内だけでなく胸にまで快楽の澱を蓄積されて、炭治郎はもうどこが感じているのかわからない。

ただ、義勇にされているという事実と、頭がおかしくなりそうな快楽で、右も左もわからず、何もかも忘れてしまいたいそうだった。

「義勇さん、義勇さんっ・・・！」

それだけを理性を留める呪文のように唱え、炭治郎は喜びで涙を流しながら義勇にしがみ付いている。顔に口付けをいくつも落とし、胸の桜色を愛撫され、体内には愛しい相手の渾身が挿入されている。

炭治郎は箱の中の出来事を払拭するかのよう義勇にすがり、快楽に堕ちてゆく。唇は柔らかくて優しく、桜色は静電気が走る様な軽い刺激が起こり、抜き挿しされている胎内は蕩けそうだ。義勇の渾身が突

き上げられれば、一番奥へと届いて一瞬意識がなくなるほどの激悦が訪れ、引き抜かれると声を上げずにはいられない羞恥を伴った快樂が生じ、炭治郎の身体がブルブルと震えている。

それを間断なく続けられて、炭治郎の身体にも限界が訪れた。義勇と交わり始めて、もう何度も達悦らしい快感を感じているが、いつまでも終わらない快樂に不道德を感じながら、今は掛け値なしの愉悅に耽溺したかった。

突き上げられる度に、引き抜かれる度に、触手に騁られた胎の性感帯に擦れて堪らない気持ちになる。理性を忘れてはしたくない声を上げそうになってしまい、すでに自分でも声を抑えられなくなっているのは承知しているが、炭治郎は止められなかった。

「っ……！炭治郎っ……！」

切羽詰まった声で義勇が自分の名を呼ぶと、さらに上下の律動は激しくなり、炭治郎は舌を噛まないように声を抑え、その代わりに、はあ、はあ、と一層荒い息を繰り返して義勇の動きに合わせてゆく。

炭治郎は自分では気づいていないようだが、義勇の渾身を飲み込んでからは、自分で身体を動かしている。その行動には義勇も驚いたが、それが炭治郎の身体が求めている好い部分なのだろう。

催淫液のせいで本能の表層が剥がれた炭治郎が、華が咲くように性的快感の追及を開花させている様は、日頃の快活な少年とは真逆の姿だ。義勇ですら、同一人物かと疑うほど、その姿は凄艶だった。

「あつ、あつ、あああつ！ぎ、義勇……さん、俺、もうっ……！」

達悦が近いのか、炭治郎は泣き声で喘ぎながら義勇の首にしがみ付く。快楽の頂点が近い洞内はこれ以上ないほどに熱く、渾身を四方八方から締め付け、これまで味わったことがないほどの愉悦が義勇にもたらされ、戸惑いを感じながらもまだ精をもらさないようになんとか堪える。義勇の額に青筋が浮かび、その忍耐の力加減が窺い知れた。

「あつ！あつ！あつ！あぁ——！！」

炭治郎がこれまで聞いたことがない甘い声で叫び、洞内が一気に強く締まってさらに蠕動する。さすがに義勇も耐えられなくなつて、夢中で腰を振り続けながら快楽に流され、炭治郎の胎に精液を放つてしまつた。

達悦してから、炭治郎は義勇の身体にしな垂れかかり、快楽で虫の息と言つた様子だ。その表情はどこまでも満ち足りていて、ただの艶っぽい欲望以外に庇護欲まで生まれてくる。しかし、今の義勇の身体は猛りに猛つていた。

炭治郎の身体にまぶされた淫液を多少なりとも口にして、その毒が義勇にも回つたらしい。

（今夜の炭治郎になら、欲望をぶつけても良いのではないか）

そのような自分勝手な考えが浮かんでくるが、よほど深い達悦に及んだのか、炭治郎は身体の力が抜けて体重を義勇に預け、絶頂の余韻を噛み締めるように息を荒くしている。

この抱きしめている相手が愛おしい。しかし、酷くしたい気持ちも湧き上がってくる。

義勇は自分の中の意外な嗜虐性を自覚して当惑したが、果てた直後の炭治郎の表情を見て、すぐに反省は吹き飛んでしまう。

ぐったりとした炭治郎を再び草の褥へ仰向けに転がし、激しく口づけを施すと、また炭治郎が義勇の頭に腕を回し、自分からも口づけを仕掛けてくる。

狂おしいほど愛おしい。炭治郎といつまでも閨を共にできるなら、全てを投げ打ってでも惜しくはないと、義勇は一瞬でも思ってしまった。

「んっ・・・義勇さん・・・」

炭治郎の裸の肌を撫で回すが、まだまだ熱い。少し舐めただけで克己心の強い義勇を興奮させる淫催液が、炭治郎には比べ物にならない程注がれているのだ。いくら炭治郎が慎ましくとも我慢強くとも、これは耐えられたものではないと義勇は推測する。

しかし義勇の頭は、目の前の月光に映える炭治郎の裸を、どうにかしたくて堪らない衝動ではち切れそうだった。

※続きは製品版でお楽しみください※